

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color
Black

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

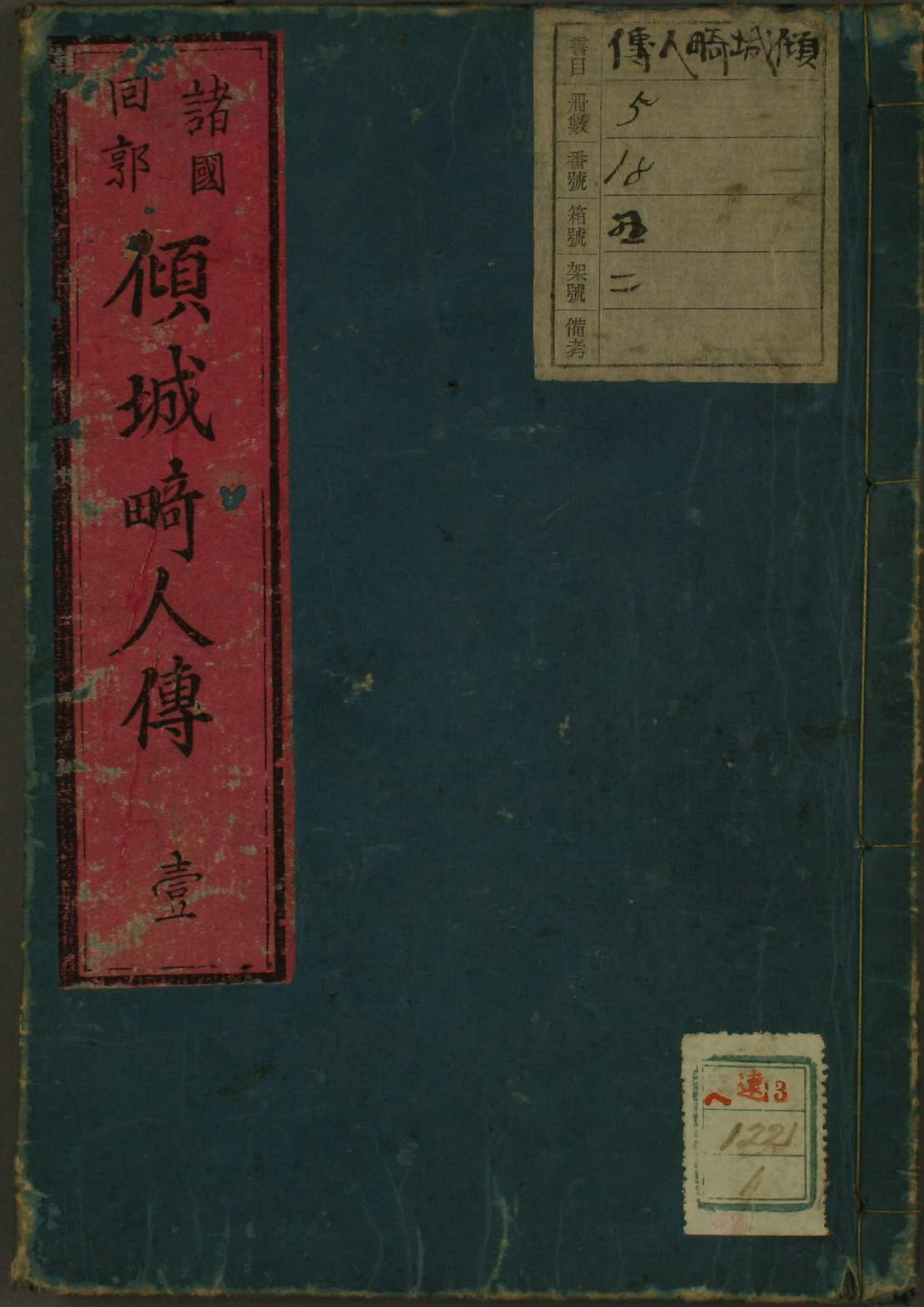
3/Color

Black

A 1 2 3 4 5 6

M 8

B 17 18 19



諸國
回郭

頌城崎人傳

壹

書目

頌城崎人傳

冊數

5

番號

18

箱號

2

架號

二

備考

3
1221
1



門 13
號 1221
卷 1-5



慎野
藏書

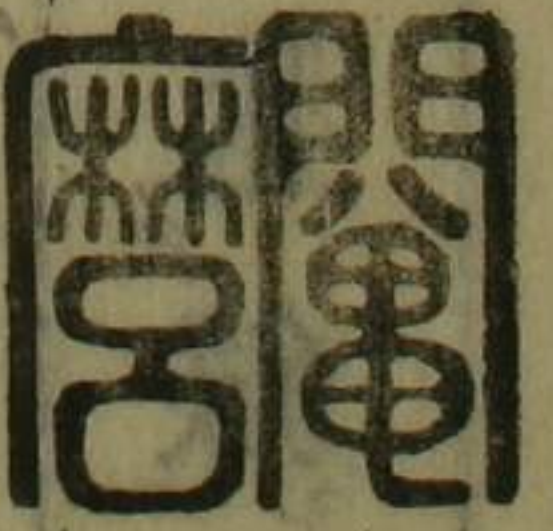
不入虎穴安得虎子子妓女之情
狀其難得也亦復如此視垂之
輕薄紈袴輩作作章臺遊遊者者往往
在其洞房衾枕之際而逢有有
彼粉白黛綠者冶容千變嬌態

百出欲語芳心而添珠淚將示
信誓以割玉臂者則自以爲得
其情狀矣殊不知是其常態而
不遇能盡其伎倆也買櫃還珠
焉能爲得其情狀哉其或稱入
天台而到仙境者亦於其情狀
也得與不得是未可知也友人
洞蘿子有慨然於此因錄青樓
中頗有操介者一二評隲以極
其情城之趣題曰傾城奇人傳
蓋欲使讀者以其難得知其易
得也可謂勉矣夫然後妓女之

情狀龜卜燭照其真假不可復
遁也古云觀於海者難為水余
於洞蘿子乎觀之

嘉永四亥初春

蘭麻呂題



ていせい女のいぢをやくは
東のうくとみ小敷廊通覽
やう名はまゆかえり
やうかあまのあま
人のあまかむ

世に於て事あるは誠と心とを免
しむるは志強めり此の如くは
事あるは誠と心とを免

洞窟羅山人

第一帖

嶋原の諸越珠玉を貯へて夫れ救ふ話

第二帖

敦賀の道芝熊を復志して仙を隠す話

第三帖

室の浮船を憤りて後良と定む話

第四帖

一木^こ辻^{つじ}の玉^{たま}琴^{こと}の意^いを^を小^せ通^とと^と縁^{えん}を^を断^たつ^つ

第五帖

一^{しん}新^{しん}町^{まち}の物^{もの}花^{はな}佛^{ぶつ}戒^{かい}と^と犯^あて^て雀^{すずめ}身^み成^{なり}報^{はく}ふ^ふ話^わ

以上五篇

夏^{なつ}衣^ぎ存^{ぞん}在^{ざい}



風^{かぜ}情^{じやう}乃^の
ら^らり^りと^とい^い
紙^{かみ}よ^よう^う柳^{やなぎ}

扇^{あふぎ}衣^ぎ夕^{ゆふ}夕^{ゆふ}ぎ^ぎ



可^か女^{にょ}

吾我十郎祐成



昌重画

大破虎造あ

虎造
石川
あ
あ
あ
あ



清原公時

谷川

里小
近の
か
燕

山古原山三



可
の
中

傾
人傳之一

山東

嶋原の清越珠玉を贈へて
又城救ふ話

於書船の楫枕も那上の里の草枕も今むらりとまう

呆く歌路の傀儡さへ唯客箇女小ま余風を跡けん

されども情を習く一衣書あは松梅より下つらむあつく

ふれりうちて媚さたる風情の中りくふる紀世もも務る

やぐくやうたて教の西ある嶋原の逸樂の世畧あり

と四方のうり男室小ま我運び枕分笑つへ柳があ

ゆむををあくる中も枯板屋清越をまとて魚のこ

ち類るる紀羨人艸あり寝いり長清まで司馬良達

鳥一

といふ儒医ありしは、今より京教へ引越して阿蒙
 陀流の外科を初めし、亦後程もあつたは、
 訓條を記し土地まで来たやうであつた、娘のお蓮と
 して、越三年切て又指す、亦苦累小、沈め自身、女の按腹
 ちとあつて、静小世、越一ける、あつた、小、けお、人、幼
 より父祝の傍小、あつて、教、夕、手、信、を、あ、ひ、く、ま、は、女、子、小
 へ、珍、ら、し、能、等、頗、る、明、人、の、筆、意、を、好、く、文、徵、明、董
 其昌が骨肉を、書、程、小、義、之、が、師、匠、と、る、衛、夫、人、の、再
 來、あ、つ、た、と、人、と、あ、や、す、り、て、搥、里、小、來、ま、て、よ、り、名、と、法
 越、と、呼、ぶ、と、全、盛、他、子、越、と、れ、と、い、つ、と、親、の、喪、中、あ、り

とく衣袋の物好も一際、好むり、め、と、氣、縮、緬、の、上、と、
 五岳真形、の、あ、つ、不、紋、黄、緞、子、の、帯、と、下、譜、の、繡、と、せ、沙、芝
 子、の、袖、肩、裾、と、蘭、亭、の、血、流、を、搦、指、と、て、隈、と、り
 各、櫛、の、梳、篦、と、片、と、と、る、紗、雲、小、美、あ、つ、た、桂、の、ひ、と、眉
 織、々、と、と、く、我、つ、つ、ふ、糸、丸、の、髪、も、髪、づ、り、ゆ、る、お、美、あ、つ、た、や、う
 ち、る、形、勢、越、え、と、京、學、小、お、と、り、諸、生、等、の、魂、を、飛
 し、廻、を、流、し、て、法、越、が、氣、象、の、う、遠、あ、つ、た、慕、ひ、我
 先、小、綺、羅、を、飾、つ、と、く、親、し、く、あ、つ、た、と、と、け、め、男
 を、み、が、け、と、劣、ら、し、と、と、年、小、程、小、美、あ、つ、た、書、籍、を、隠
 し、美、く、師、の、怒、を、蒙、り、或、は、衣、服、を、代、あ、し、と、未



孫とある人筆許り知れざるは二条室町の辺小本阿弥
 左市とて刀劍の目利を後世とする男ありけるか急ぐ
 諸越が才色優美なるは誠傳へばれぬは珍じり
 控女と一衣青様の酒を酌するは殊小幸來の憂を忘
 らしむる是あんと思ひまゝ或は崎系小越死守る月
 信小おろり初めて信越を見る小越の蓮葉のつやうなる
 かく眼の秋糸の潤うが如く常嫁月殿を離る花
 燕新粧ふよまゝる姿ありた市はふふまゝる信越が
 容るる小深くまづてころろ此小凝りやすりまよる
 目お來りて信小全銀を撒漫し諸人を喜ばしむ

信越りやより煙花を出んと欲するをありけむはた
 市はあざくしくぬれぬはあつたふ占とひく終身を任
 さんゆまをいとも求むるまゝもぬやふ人の篋の中は
 宝の聚盤なる囊中日々小命しくなるは樂籍相末
 者の媚魚つらひ一笑盡も漸く小埋は亭主阿桂は信
 越不知ちあつけく一日ももやくた市を退さけんとすれ
 とも信越がいつやうた市との言初よりあつた
 小あはれ我ゆへ大金銭費してまゝめて初めぬは
 蘇忽小情多た詞は出しかつたあまふ小控女の
 実多た者と人のいふまゝふと只身つづきく阿彌は



喜もせんとす今いふ市小對し種々の
善興をいひ罷り渠が惣とて出さるる子我信す
於て人の懐の冷しくあるにつけて公の裡よく執する
たよりい海小波りい小振言ひし熱中我やうい信す
止る處死ういりうもさく法越を傳出し約束の如
く箕掃の善いせんかのをたと市い亭主小あましく
諸越が力の代いり程ありやとあまのくまは言ふ
あまやうい人極めく貧窮ありはたとく價と安く
いふとも小詮金子の工面い出来すし調りざるとた
おのづらう愧て来るべうい友すきく換失とくあま

うち小我家の悪魔を儆るは一限の若るありと
術をいひくさくは笑合とてい諸越君い年季い
ぶまをいひ孫小當時双あは金盛なり別人あうべん
子又百兩をいむむげきと半君今まし一は時あま
武百兩まで進まし一儆そきも二日を限てたのち小儆
成とりたのち小人を後せんり一之日をい金子調ひ
たつとも再び室小来りぬあをた市こま我あま
ら右の日限小金子我調達せば遠まき法越を後
ふしといひ後札をとりてあまんとの子亭主信し
則金子と引智たまをきんごき糸虫認め出しけき

花市を納めくちぶく家不ぬりけしが是れを法越
 が為小大金を投うちくは衣服諸及具を日用の
 器物小くするまじく悉く賣盡し或は貨物と
 然之る番四の貯へて是米を此世帯に中く貳百支
 の金子個へんこと思ひをよらば又此のを後ぶれば
 の憑しは友もわらうまじいせんと思ふとつ小あひ
 ねひつ、眼腫小潤をたへく既小き日もまじりぬる
 然例のめく法越が許より使の老消息もてささり
 疾披さるる小は程いささしくとの形勢もむらだいな
 こころせぬや今宵は是れ志をすしとすともあはせ

の人なよこやや小惚めたる故左市讀終りて昔
 より利をひく受る者へ利をて疎く利足りて受
 るとのう彼河桂が如死の人情もある小結と其は
 とむるは案が公中の智さうざるとけり一錢月の七
 案内志を来りしは松原通の刀屋幸助との心
 ひやうよりな我胸りて絶ぐく袖の潤り柄
 をくろり呼は茫然とまじく産志するおしも門口より
 案内志を来りしは松原通の刀屋幸助との心
 者の者なり携へたる風呂敷包のうちより伯耆の
 安綱ら赤く短刀と雲路の正宗二腰をえ出

こまが同利を乞ふた市の家職あがり今又こま小
すやぶれは幸助小むらうの角の心出るあまは
あ日小用ふを紛きてを静あらぬ大切の同利を
率尔こまやうとがこまねく篤と熟後いふ
る先今日持ゆりて明後日來りまといふ幸助日
よりた市が簾直まぐ町寧なる生雙とよく知るが
ゆふちうらむはこまを笑宅小新やさん明後日
めこまを來りては同利のた心をあつこまといふ
くまゆりたる世の流ふを徳道の妨とら惜る
かま悔むをゆふたもいふをこま小入窮する時いふ

ぬまじりこまやうこまも正直なる天性のた市も金子の
二面小切つまりたるお揃なるまぐく幸助は
ア刀城なるより不計恩業つきて是免責の代
目物ちうと後こま舟をゆふる心地まぐ直小賢家へ
持ちたる金子遠金子貳百又指両調ひこりる日
日數の二日たるまは先こま後く休むたる相三日湯原
さる月橋の亭まはた市と約束まぐよるま今日湯原の
三日たる小渠が來るま我指量小遠りた金子調
まは故小こ我よるま不計を以て彼多免神を退け
たりとまこまを居るまへた市の小切ま

風流志く入来りけし亭主出迎へて金子限日か
が約せしうら小左市答へて既小左市に
の價の金子貳百兩則是小ありと懐中より金出小
亭主左市が金子ある哉見く魂を飛く大左市信
天志く云貴君實小諸越左を傳出しぬふをそ
あしう我前小貳百兩を途にべしと候小これと
是格接をと對候せしう小ありぬ中くこそ是武の
金子はそを左市に成つてさるる思ひもよる候れども
我申たる一言もあはれ先格接原小姓くお候し
見るべしと左市を起んとす時小左市社を引とめて

る金子は信のりいお前内を信越が方へかきしと
は格接渠へ親方と信小左市へ来るべし今日小出で忘八と
高後格入るる益なりそ方前日小三日の限を定
め貳百兩の小調りた小金子を左小左市とつこさ
といふ信さる一札を書し何れぞ約儀の如く引替ふ
左市を信左市連とらんと意對いすべし決せざる所へ
格接原係系諸越を付し来りて亭主小左市百兩の
仕切を乞ふ亭主強高志く心の程小先非と悔
あがういりまも志くけ信の高後を止させんと左市
小むらひ巧ふさるべしと信小左市をともた市へ

山ナ
多々窮小ありてより以来渠小種々の無事と書上られた
る遺恨あまざるをこれを取引せしむる積怨の色
残歌一序を抄ていふ言葉よりゆが中不を言ふも
始終分明あまざるの忘八がふゆむある哉よく知りあが
ら渠と一應の対候も乃を以自己の了答と云く
日限の後文を認め判へ他の奉公人を自由とする志く
金子と引替ふつてさんと云句引の飛のがあなうら
たやうの不持をわけて生活とするや但し一係書係
判を巧く拵へる金銀を貪るは今一言の返答は才
乙廳小訴へ書裁候小紙さへ一亭主これを皆と忽

ちをいふは其ひめり左史を讀さむんべいりある百五圓と
ら人々大に不忠を致すをいへる死を謝し大君のま
らば一件他言の教しめんと戸棚より金子三百両
を取出した市が持来の貳百両小足し於合志く
徳越が狀方小ころしける拵候屋何系も氣れ毒
くまんと目次より亭主が貪欲ある性をあくま
く其の御の容赦もたかくて是を裁文とり徳越とつじ
く立廻る候そ亭主の換金を出しつてつと
かきとくも口惜く思ひ後悔胸を盡のふあまると
小徳り多々其はささやうさく唯た市と徳越が

居る方を恨しげ小睨みてを何とぞ言ふべしわらわど
 驚きしつらうも客つらう人を撰み不復さすしはた
 たり初て遠越いた市と佐小揚屋をさすは
 人と敬して予生よりむ志りの女市千枝といふ
 かの出口の青楼ふるさとは先それか家ふりて
 名残を惜みん為来つらといふ千枝遠越が意を
 かんたうの先をとも連はるやうたういそたあ何故
 我と縁たふるふ遠越がいふ氣をひか志のひそ我
 今このめくはまふ具志き今日廓を離るありと
 言へくは千枝も美び祝ひく何れのみとも

傳ひる猶ふらち儀攝部依揚巻成さめ廓り
 何の程の極女悉く来りて遠越こせの目出さくも
 の後良さを均さうと妻此を曲成祝ひ別れの酒を
 酌かす時ふ全盛の半より遠越小縁る勢あり
 あら撮へや妹承のふ世界 ひあぢ
 時をばくめと室笑乃一本は ころりく
 死るとり知遠る江の水の那 ちえさ
 る成何やうもこれともこときあけはるは
 各舞楽の藝を盡して二人が如ふふあさやでん
 送り別れを惜む千枝まづらう一の授筆を結り

事りて二人家小ぬりぬふとも安身定めぬりて
 一は城麩の画軸競香を御前御所のふくじ里の婦
 妹の錢物を以中お收め置りては徳越これと交
 せめぐり城糸うきくぬぐ後小礼を述べし事の
 君も身の内りりちとせ千案せりてたのも
 一はある世を卜めは潤こそ偽るべと別世の
 くる偽系如きや徐くと解出せば行もとす偽を
 うる是女の定めちりた方とせこれより一扱も左
 市は徳越を偽ひく我家小ぬりけるが多しは偽小
 位ありし一なる家内のみさぬを徳越つくぐとんて

いちやうは身ゆる僥しき住居ある小武百ぬれ大
 金をともいふ志く調へひしそ左市さぬふ取て
 あり一は身城公地もほいさげ咄他ふえて借るはし
 善ふ徳越きてこれをまゝとせは頼りふらぬゆけは
 左市も今いつみ善く明日刀屋幸助が同利小遣し
 くるふを質物とありし金子也是志するよりと具
 小ぬり是非の目夕方よまお来る苦ありそ時彼
 刀ちり不放てふ幸助怨言ありといふも必立腹し
 く官府へ訴認ふ及子屋死す我善てよりそ善悟へ
 ころあしり及あぬ坊徳る身と死を廊中お晒し

其方と約しる夫婦の契も結り世に果さんや
 情のなやたしけ方の牢獄小懸をいふやうの可哀な
 うらなともま子思ひ盡るる愛小なりと涙あふり
 かしらまはは法越もそま実なる志の程を感し作
 小落涙をいふたやうのりちたうべ必しうらめめ
 か我弟廓小あり時もめ苦ぬしの事小あらん事を
 の思ひくくくくくはは終身の生活小くくくぬや
 為くくくく城盡し里へ入来る京田舎の女を偽り
 志くくくく送るるさぬぐの宝を悉く筐小收めく
 千枝小取け盡しあり里の姉妹の荷物と偽小中

ぬきとも是く我ぬしの厚恩小報ふくたうまば子
 くくくく小挿し費用を贖ひぬくと千枝がふくくく
 の提匡城ひりけ大泰の牛頭香亞刺敢の雀腦香
 金襴環八宝器珊瑚の枝瑠玕の緒綾夜明珠火森珠
 球琳瓊瑤劔玉鏡玉通天犀人魚膽鳳珠龍樹一と
 志くく時ま價定めぬく宝の救くあり左市初
 めく法越が年来の公勞城知り頗る感既まき其心
 の思を寤死別そのちろむをころちて責払ひる小金
 子八百支をねらるまけまば貨物小入るる小刀とま出
 し幸助が来る城待うけく遠まむく同利をわく

及一けりる残残王の金子を以て是中を妻拂ら
 長旅法乃具等を求めり今何小不足たき位
 居とありとまき清越も名を續江と改めえより紙
 筆なるゆへ女子の統右人を集め書家を始めり
 多沙法を述小隠ま方々入門の女子あやとあり
 蟹昌志とるまけり左市ハ已前の如く同利を渡世や
 あ一誌越る母成呼び述へてり苦ひつ、親子之
 人婢女とるまを石をうと世成と安小等けると人
 評小田小高を規りの業名をさるる能く
 左市ハ誌越る客色風流の奇也小あづりて力

残免く志とれとも死一信の借金志くいのと
 眼の呆しもま死戲氣を盡すと渡材と一ト小
 論どあうと傾城の實と鶏印の四角あ
 とい無錢客の言程ゆこと残悦び術をわつた
 いやと深うらぬ意中あり金痛際惚ぬのてん
 一夜の契も二世うけてと忍ふ心あてていりてり
 女島の真實を得ん扱て我誌越る左市が品
 行の厚情小あざさき貧死をとも厭むとま残
 法くして本さの如く力を任されバ刀屋奉助
 を赤虎の神とも信る人阿柱が三百ちぬれ金を

山十
矢やひひもも利り懸けふふのの之の秋あき風かぜ客きやくとと楊やう柳りゆう
嗟あは呼あ青あお楊やうののままるるものもの空そら窮きゆう嵐らんののつつてて猫ねこをを吐はき
乃なここゆゆららりり哉や毎まい々々よよかかりり

